

託された思いを展示、博物館をオープン

後志管内・京極町 NPO法人北方アジア文化交流センターしゃがぁ

「この博物館で、私にとって一番価値のある展示品は、これです」

NPO法人北方アジア文化交流センターしゃがぁ代表の西村幹也さんは、2017年（平成29年）から本格的に京極町でオープンした北方アジア遊牧民博物館の展示物をショーケースから取り出して、筆者に手渡してくれた。

「触って下さい。手にとって、重みとか肌触りも感じて欲しいのです」

それは、赤錆びた鉄製の大きな靴べらのようなもので、とくに貴重なものにも思えない。訝しむこちらの顔を見て、西村さんは笑った。

「モンゴル北部国境付近に住むトゥバ民族が使っている道具で、おもに玉ねぎや、ゆり根を掘るときに使うものですが、他にも様々な使い方ができて、これ一つ持って森に出かければ役に立つのです。柄の部分はその場で適当な枝を調達しますから、鉄製のこの部分だけを持っていけばいいわけです」

採取や狩猟の道具であれば、他にもいろいろ展示されているのに、「どうして、特にこれが一番なのですか？」と尋ねると、西村さんは説明してくれた。

狩猟生活を行っているトゥバ民族の友人が、祖

父から親、自身へと代々受け継いでこの道具を使っていたが、後継ぎがいなくなってしまう、西村さんに託したという。

「渡されたとき、『おまえが、これを使ってくれ』としっかりと言われました。そうした思いこそが、私にとって一番価値あるものだからなのです。ですから、私なりの方法でこれを使わなければ、と強く思ったのです」



京極町にあるオフィスと多目的ホール、奥に博物館がある

託されたものや、友情の証にももらったもの、出会った人たちと一緒に作ったものなど、活動を続けるうちに、西村さんの元に多くのものが自然に集まってきた。モンゴルでも急速に進む社会変化の中で、生活が変わり、今では使われなくなった道具や民具が多くあり、そうしたものを保存するためにも、多くの人に見て、触れてもらいたいと思うようになった。

それが、博物館を作るきっかけになったという。



■ モンゴルに恩を返したい

西村さんは、1966年（昭和41年）東京生まれ。東京外国語大学モンゴル語科を卒業後、1991年に内モンゴルへの留学をきっかけに、モンゴル人、トゥバ人、カザフ人の遊牧民と関わるようになった。

もともとはジャーナリスト志望で、日本ではあまり知られていない土地のエキスパートになれば専門知識がより生かせる、とモンゴルを選び、モンゴル語科に進学したが、モンゴルに留学して考えが変わっていった。初めて滞在した内モンゴルで世話になったモンゴルの友人たちと、もっと付き合い続けたい、と思うようになった。

「あのとき、天安門事件後で、彼ら自身が大変な時期だったのに、異邦人である私に無欲に捧げてくれたのです。その恩が忘れられません。いや、忘れてはいけません。彼らと関わり続けていくことが大切だと思いました」

西村さんは、しゃがぁ設立の動機について同ホームページに書いている。

「人と人の関係が希薄になっている今の日本社会に生きる自分が、人に厚いモンゴル人たちに、人に戻してもらえたと思っています」

そうした人々のことを日本でも紹介したいと、1994年（平成6年）に情報紙「しゃがぁ」を発

NPO法人北方アジア文化交流センターしゃがぁ

行。モンゴルを紹介するための活動を始めた。「しゃがぁ」とは、モンゴル語で動物のくるぶしの骨のこと。子どもたちの遊び道具になっているほか、豊かさの象徴ともいわれている。

西村さんは、モンゴルへのスタディツアー（旅を通して学ぶ体験ツアー）や、モンゴルに関するCDやDVDの制作販売、モンゴル音楽のコンサートツアー、写真展など積極的に活動を展開、2008年にはNPO法人格を取得、さらなる情報発信や活動を広げている。

また、研究者としての一面を持つ西村さんの専門分野は、「文化人類学・宗教人類学」。研究分野は「モンゴル地域のシャマニズム」、「近現代におけるトナカイ飼養民ツァータンの生活変化」など。モンゴル地域のフィールドワーク（現地調査）も、20年以上にわたって続けている。2005年から3年間、帯広大谷短期大学で講義も行った。



西村さんが通訳を務めたモンゴル乗馬ツアー

■ 北方アジア遊牧民博物館の設立へ

北方アジア遊牧民博物館の構想を思い立ったのが、2005年（平成17年）。他にも様々な活動を行っていたため、なかなか計画が進まなかった。山のふもとの土地を借りたあとも、整地や建物の建設などできるだけ自分たちの手で行い、構想から11年かけていまの形になったという。10m×10mほどの床面積で、それほど大きくはないが、北方民族との濃密な関係を続けてきた西村さんならでの博物館となっている。

展示の仕方にも工夫がある。例えば、使い込まれた馬具の横には、翁の写真があり「草原の遊牧民 バッドヒシグ」と書いてある。紹介文には「馬に乗ることは草原を知ることだ、と教えてくれた」とある。また、鮮やかな装飾が施された民族衣装や、刺繍小物の横には、「カザフ刺繍を極めた鉄人 アイナグル」の写真と紹介文があった。誰がどういった目的で、こうした作品を作ったかが一目で分かるようになっている。

博物館には、北方アジアを代表するモンゴル、カザフ、トゥバ民族の生活民具を中心に展示されているほか、敷地内にはホールや図書コーナーなどもあり、様々なニーズに対応できるようになっている。モンゴルゲルの組み立て体験や遊牧民講座などを行い、総合学習の場としても活用したい

という。

東京出身である西村さんが京極町を選んだ理由については、母親が北海道出身であった縁や、自分の子供を育てるのにぴったりの環境だと思ったこともあり、2006年から京極町に移り住んだという。

「ここに展示されているものは、誰がいつ作ったか、誰がくれたか分かっています。その人の顔が見える、その人がどんな人だったかを伝えられるような博物館にしたいと思っています。だから“遊牧民”博物館なのです」

西村さんは、力強く言った。



博物館のホールで行われた写真展について説明する西村幹也さん

■ 学ぶための体験ツアーを企画

現在、しゃがぁの正会員は15人、賛助会員（年会費2000円）は約100人。年間を通して、モンゴルを紹介するための様々なイベントを実施している。小学校などへ出張して演奏を行う



NPO法人北方アジア文化交流センターしゃがぁ

「遊牧の民の調べコンサート」をはじめ、モンゴルの土地や人々を紹介する写真展、カザフ刺繍やモンゴル刺繍、フェルト細工のワークショップなどを行っている。また、旅行会社と共同企画しているスタディツアー「モンゴル原産馬タヒの行動観察ツアー」や「トナカイに会うタイガの森宅ステイ」など、自然や文化に直接触れることができるツアーがある。ほかにも、「京極町ふきだし公園」にある販売ブース「くるま de オスト」で、遊牧民関連商品の紹介販売も行っている。

以前、西村さんのガイドでモンゴル乗馬ツアーに参加した五十代の女性は、「どこまでも続く草原を馬で駆けたときの爽快さや、ヤギを解体するときの遊牧民の手際の良さ、モンゴル人との交流で感じた人の温かさなど、若いときにモンゴルに触れて自分の人生が変わりました」と、ツアーのことを楽しそうに語ってくれた。

■ 北方アジアの価値観を知って欲しい

北方アジアの生活習慣や、自分とは違う価値観を知ることは、今後の日本にとって、特に次世代を担う子どもたちにとって必要なことであると、西村さんは強調する。

「森の中で、彼らは百頭のトナカイを入れる柵を、いとも簡単に作ってしまうのです。一時間半ほどで出来てしまったのには驚きました。直径

10センチほどの丸太を30本ほど森から調達してきて、ちょいちょいと柵にしてしまうのです。私なら、丸太を切りそろえたり、等間隔に打ち込んだりと、たぶん数日かかるとおもいます。でも、大自然の中では、トナカイが逃げない柵を作ることが重要であり、きれいに作るなど必要ないのです」

歴史的に外国文化に直接触れる機会が少なかった日本人にとって、広大な大陸で異文化と切磋琢磨してきた北方アジアの人々から学ぶべきことは数多いと、西村さんは力説していた。

■ 連絡先

〒044-0131 虻田郡京極町川西 304-4

NPO法人北方アジア文化交流センターしゃがぁ
代表 西村 幹也（にしむら みきや）

TEL : 050-3553-0302

Email : npo@shagaa.com

URL : <http://www.shagaa.com>